FOREFRONT 2022年3月 No.78
インタラックグループ・学校教育便り　フォアフロント

発行：株式会社リンク・インタラック
担当：事業統括部　商品開発ユニット
住所：東京都中央区銀座四丁目12番15号
TEL：03-6853-8265　FAX：03-6859-9070　E-mail：marketing@interac.co.jp

GIGAスクール端末でオンライン地域間交流の試み

高島市立マキノ東小学校、マキノ西小学校、マキノ南小学校（滋賀県）
ニセコ町立ニセコ小学校、近藤小学校（北海道）

GIGAスクール構想による端末と通信網の整備で、オンライン授業が可能になった自治体も多かった2021年度。新型コロナで行事や校外活動が制約を受けやすい状況で、外部とのつながりを作るのに役立てたいと考える学校も多いでしょう。「どうやって端末を活かすの?」と、迷ったときにおすすめなのが外国語の授業を活用した地域間交流です。学級担任やALTと共に英語交流をすれば盛り上がること間違いなしです。自分たちの地域のことを伝えたいと「相手に伝える」必然性が、積極的な発話を引き出し、相手のことを理解しようとする態度の育成につながります。2021年12月、滋賀県と北海道の小学校が実施した事例からそのメリットを考えます。

滋賀県と北海道の6年生がオンラインで交流

「せーの Hello!」「あ、聞こえる! Hello!」──2021年12月上旬、滋賀県の高島市立マキノ東小学校と、北海道のニセコ町立ニセコ小学校の6年生がグループ交流を始めたときの第一声です。

高島市の旧マキノ町と北海道のニセコ町は「カタカナの名前の町」として、以前より姉妹都市協定を結んでいました。マキノ町が近隣と合併して高島市となった現在も、交流都市として関係が続いています。ここ数年はコロナ禍の影響でなかなか交流の機会が持てずにいたため、オンラインを用いて、6年生の英語の授業で地域間交流を同時に行うことにしたのです。マキノ東小（16人）、マキノ西小（14人）、マキノ南小（16人）と、ニセコ小1組（21人）、2組（19人）、近藤小（4人）が、全3回の交流を行うことにしました。めあては「ニセコ町とマキノ町同士が英語で交流し、お互いの町について知ろう」と設定しました。

Zoomを用いた交流授業は双方にとって初の試みとなるため、準備は同年の夏から始めました。まずは日程調整を重ねて関係者が揃う初回の会議を7月に開き、実施までに毎月の会議を持ちながら内容を協議していきました。交流を通じて子どもたちにどんなことを学んでほしいのか、議論を交わし、共通認識を持つことを心掛けたといいます。今回はだれもが初対面という状況でした。そこで、互いの地域や英語教育の取り組み、子どもたちの様子など情報交換をしながら企画を立てていきました。

互いの英語教育の情報交換から

高島市では、かねてから小中一貫教育を進めています。英語教育においては9年間の学びと指導の連続性を重視する中で、小学校での音声を中心にした学習から、中学校での音と意味、文字との結びつきを理解する学習へと系統的な授業の充実を図ってきました。中学校区単位で、小・中の先生方が授業公開をし合ったり、共同で授業研究を進めたりして英語教育の充実を図っています。

マキノ東小・西小・南小でも、日頃の外国語の授業では音声を中心とした学習を行っています。ALTとの会話を楽しむ児童もいる反面、英語が聞き取れない、話せないと難しさを感じている子どももいます。そこで、交流授業では「目的意識や相手意識を大切にしながら、交流を通して、伝えたい内容を考え、相手に興味を持ってもらえるような発表にすること」をねらいに、話したいことを相手に伝えるには、どんな点に気を付ければよいかを考える活動を計画しました。

ニセコ町は、海外からの移住者や観光客が多い環境を生かし、子どもたちが英語を通じていろいろな人と主体的・積極的にコミュニケーションを図り、自分の思いや考え、意見などを生き生きと伝え合う力を育成していきたいと考えています。町には地域の多文化共生を推進する海外出身の「国際交流員」が在籍していて、翻訳・通訳、観光客の手伝いや学校訪問を担うなど町ぐるみで国際交流活動が盛んです。

小学校には英語専科を配置し、これらの地域資源を有効活用した授業を展開しています。「インターナショナルリーディングプロジェクト」は、国際交流員が来校し、絵本の読み聞かせや、ゲームをしたりして交流を深める同町ならではの活動と言えるでしょう。今回の交流を通して、6年生になってから前の単元で学習した表現 “We have ～” “We can ～” などを活用して、ニセコの魅力を伝えることをねらいとして全3時間の単元を構成しました。

事前学習・発表準備とICT活用を同時に

交流当日の時間は各校とも1コマずつが3回。成功させるには「授業面での準備」「リモート環境の準備」を同時に進めていく必要がありました。

まず、授業面での準備です。マキノの3校では、子どもたちはマキノのよいところについて調べ学習をし、調べた中でニセコの人たちに伝えたいことを考えました。その後、既習事項から使える英語表現を取り出し、グループで写真を集めてプレゼンテーションカードを作成しました。ニセコ町でも既習事項のおさらいをしたり、紙芝居形式のプレゼンテーションカードを作って発表の練習を重ねたりするなど、それぞれ準備を進めていきました。

両方の学校にはALTが在籍しています。自身の国ではなく、勤務する地域のことを、ほかの地域の子どもに紹介する、という活動はとても刺激的だったようです。マキノ町では、町の観光パンフレットなどをALTに渡して情報提供し、子どもたちとともに準備を進められるよう配慮したといいます。

さて、もう一つの準備は、リモート環境です。月に一度の打ち合わせを重ねる中で、先生方のICT活用スキルも次第に上がっていきました。あいづちやサインなどのボディーランゲージがリモートでのコミュニケーションには不可欠なこと、マスク生活で口元や表情も読みづらいため、発言だけでなく体全体で反応することも大事だとわかり、子どもたちにも伝えていきました。

交流する会場の工夫も見られました。ニセコ小では余裕教室を使って「各教室に1グループずつ」で実施できるように設定しました。パソコンや机の配置が自由に変えられるのがメリットです。6年生が4人の近藤小学校では、1つの教室で行いました。他の端末から音声が入ってハウリングを起こさないよう、子どもたちは各自イヤホンをつけて取り組みました。

こうした準備を当社が教育委員会、現地の先生方と共にバックアップしました。打ち合わせ時には当社支店の担当者も加わり、ALTとの橋渡しや、効果的なICT活用法の提案などを担いました。地域間交流をする場合、双方の学校に元同僚の先生がいる、知り合いがいるといったケースが一般的ですが、今回は当社のスタッフが間に入ったことで、双方のやり取りもスムーズに進み、先生方は事前準備や子どもとのリハーサルなど実質的な指導に集中できました。

交流を通して高まる「話したい」気持ち

こうして迎えた交流当日、双方のALTのリードのもと、子どもたちの交流は成功裏に終わりました。まず、プレゼンテーションのお手本として、双方のALTが地域の紹介をします。その後、Zoomのグループ分け機能「ブレイクアウトルーム」を使って、マキノとニセコの子どもがグループ単位で1つのルームに入ります。そこで町紹介のプレゼンテーションを行い、英語で質疑応答をしました。高島市で生産される桃やブルーベリーなどの果物を紹介し、“What fruit do you like?” などと質問して交流を深めることができました。子どもたちの声も大きく、はっきりと発音できていました。

最後に一斉画面に戻り、双方で感想を伝えあって授業は終了しました。「マキノ町のことをいろいろ教えてくれてありがとうございます。いい経験になりました」「ニセコ町は自然が豊かな場所だということがわかりました。マキノと似ているところがあるなと思いました」などと、子どもたちは積極的に手を挙げ、パソコンの前に来て発表していました。

授業後の子どもたちの様子を聞くと、マキノ東小では「最初は緊張したけれど、話すごとにすらすらと言えるようになったので嬉しい」「全く知らない人とでも、英語で話したり、質問をしたりして楽しかった」「一度行ってみたくなった。また、機会があれば交流してみたい。次は、ニセコに行って交流してみたい」と、活動のねらいどおりに取り組めたようです。

ニセコ町の子どもたちも同じです。英語専科の佐藤兼祐先生は「ALTとこの単元の活動をデモンストレーションして概要を説明したとき、子どもたちは、やや不安そうな表情をしていました。でも、練習を経て当日は友達と協力しながらはきはきと伝える姿が見られました。互いの発表が終わった後は、雪の様子を見せたり、好きなことを聞き合ったりなど、楽しく交流していました」と、話してくれました。子どもたちからもポジティブな感想が多く聞かれたといいます。

交流の様子は双方の教育委員会の先生方も見守っていました。「英語が通じた、わかった」という達成感と、遠くに住む同級生との交流という豊かな経験の両方を得られたと、評価をいただいています。

課題感を次の授業改善へ

実際にリモートで交流してみて「もっとこうしたい」という欲も出てきました。「英語でのゲームなど、アイスブレイクの時間を取ると、リラックスして交流に入れたように思う」「当日は1時間扱いではなく、事前準備の時間等も含むと2時間扱いの方がよかった」「せっかく英語で交流するのなら、お互いのALTと話せる時間がもてる時間があるとよい」など、よりねらいに近づける活動のイメージがわいています。

今回の取り組みを通じ、英語を使う必然性のある場を設定することが、子どもたちの英語への関心や、コミュニケーションへの意欲を高めることがわかりました。間接的には子どもたちのICT活用能力や、教員のICT活用能力の向上にも貢献しています。

英語を用いた地域間交流は、学校ごとの特色や教育活動によりバリエーション豊かに構想できそうです。例えば、修学旅行の行先同士の学校で、地元を英語で紹介するプレゼン交流会なども考えられます。

英語で交流する意味や必然性を持たせると、子どもの学習意欲が高まり、先生方やALT自身も交流を楽しみ、授業改善のヒントを得るよいチャンスにもなる。今回のマキノ×ニセコ交流は、そんな確信を持てる意欲的な教育活動になりました。

双方のALTが英語で地域紹介をした後、子どもたちもグループ交流を始めました。